

第9回 トップの素材について その3

前回は、アルキメデスの原理に基づく、トップの素材の違いについて、解説してきた。

今回は、素材面から見たPCムクトップの位置づけと、ムクトップとパイプトップの具体的な違いについて、使用されるシーンに沿って解説していきたい。

1. 素材面から見たトップの使い分け

前号において、グラスムクトップ、PCムクトップの硬度を比較し、硬度の面から使い分けを説明した。補足説明として、トップの現在市販されている状況と素材面から見た使用の可能性について、表でまとめてみた。

なお、表の○、△、×の意味は、

○：販売されており、一般的な使用が可能

△：販売されているが、素材面から使用する条件を考慮する必要あり。

×：販売されていない、もしくは入手が困難

	元径 0.6mm	元径 0.8mm	元径 1.0mm	元径 1.2mm	元径 1.4mm (PCは 1.5mm)	元径 1.6mm	元 径 1.8mm 以 上 は 省略
PC パイ プ	×	×	○	○	○	○	○
P Cムク	△	△	○	○	○	×	×
グラスム ク	○	○	○	△	△	△	△

*注

PCムクの元径0.6mm、0.8mmが△なのは、PCムクの硬度の面から、長くすると、トップが反り返って、立ち上がりに違和感が生じることがあるからである。

グラスムクの元径1.2mm以上が△なのは、グラスムクトップは硬く、太くすると、ボディとトップの付け根に力がかかってしまい、ボディ側にクラック（ひび）が発生したり、折れてしまうことがあるからである。私が製作する「尽心作 匠」では、グラスムクトップの元径1.0mmは、ボディに埋め込む部分を通常の仕様よりも多くし、かつ、カヤはもちろん、羽根でも、接合部分に、竹竿の口巻きに使用するスガ糸を巻いている。

上記の表からも分かるように、素材の面から見ても、PCムクトップはグラスムクトップと

PCパイプの中間と言われる所以である。

2. ムクトップとパイプトップの使い分け

とあるトップトーナメントにムクトップとパイプトップの使い分けについて尋ねてみた。「素材によるトップ比重の違いから、「動かすムク」、「止めるパイプ」という感じです。パイプウキはバラケ、クワセを止めて釣る釣り方で地合いとしては普通〜ちょっと強めの時がいいと感じます。ムク系のウキは弱い地合いの時のバラケとクワセを動かして釣る時とパイプトップでは抑えきれないもっと強い地合いのバラケを強制的に入れたい時（そのくらいアオリがきつい時）の両極端で使い方を考えています。」

上記のコメントを踏まえ、ムクトップとパイプトップの使い分けについて、より具体的なシーンに応じて解説していきたい。また、話しをわかりやすくするために、グラスムクトップとパイプトップで比較していきたい。

グラスムクトップが使用される代表的なシーンは、(1) 盛期の両ダンゴ釣り、(2) 厳寒期、(3) 渋い地合いの底釣り ではないだろうか。

(1) 盛期の両ダンゴ釣り

盛期の両ダンゴ釣りでは、グラスムクトップの比重による下へ、下へ沈もうとする力を利用して、エサを入れる場合である。この原理は前号で説明したが、もうひとつの論点として、「グラスムクトップは、動かして釣る釣り」、「パイプトップはエサを止めて釣る釣り」という点である。

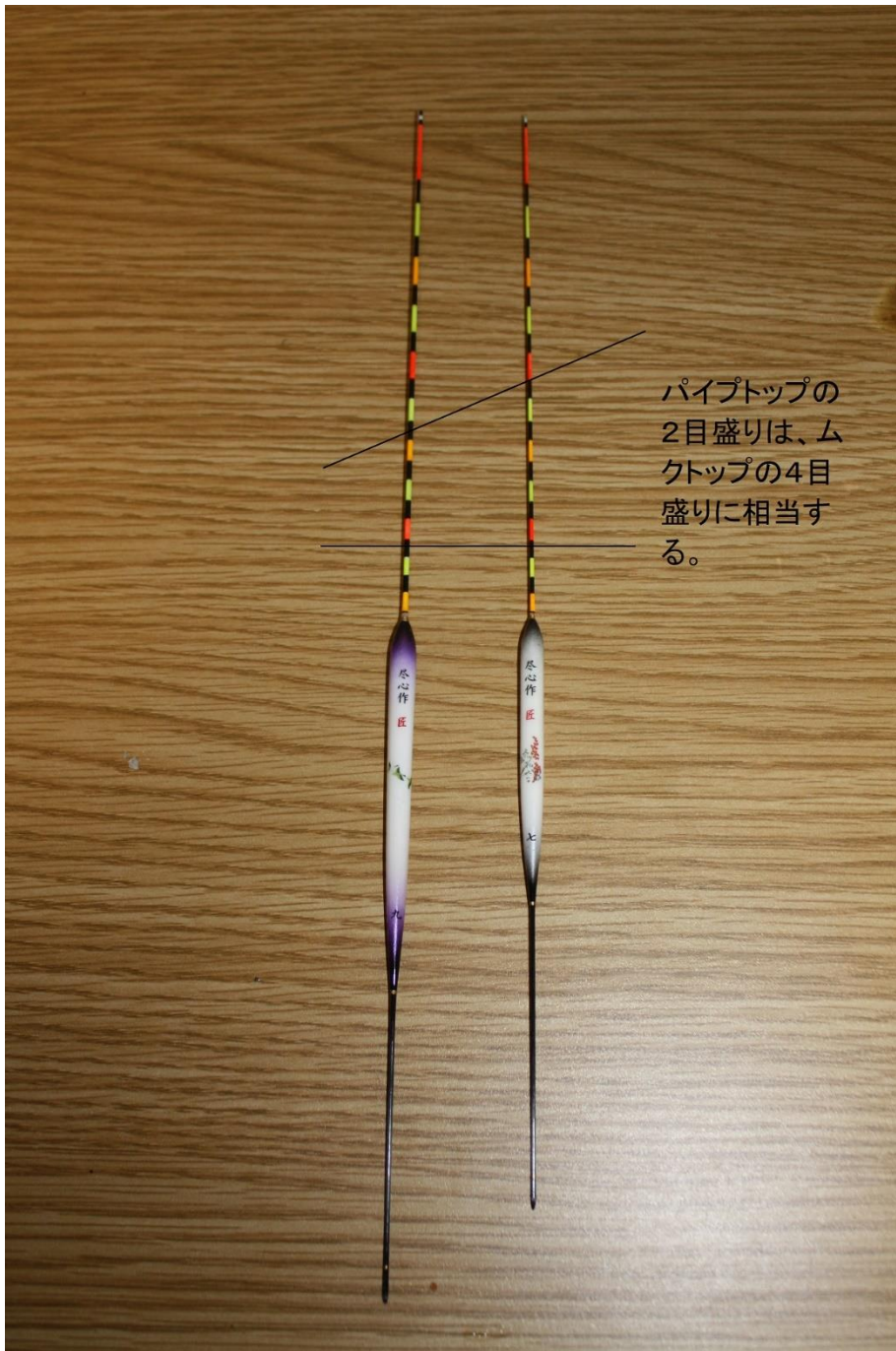


図1：編集部の方へ、イラストの作成をお願いいたします。

図1を参照いただきたいが、盛期の両ダンゴ釣りで使用されるパイプトップは、元径1.4mm、先端径0.9mmが多い。一方、グラスムクトップは、元径1.0mm、先端径0.6mmが多い。トップのなじみ幅は、素材に関係なく体積（太さと長さ）に比例することから、元径1.4mmのパイプトップのウキと元径1.0mmのグラスムクトップのウキでは、なじみ幅がおおきく異なる。同じエサであったとしても、パイプトップでは、2節なじみでも、グラスムクトップでは4節以上のなじみ幅になる。

この差によって、柔らかいエサでも、釣り人はなじみが出ていると認識する。
逆にパイプトップでは、なじみ幅はすくなく、上へ、上へ上がろうとする力の作用によって、しっかりとエサを付けてしまう。この結果、タナは凝縮される釣りになる。
盛期において、大型主体で、食いが渋い場合、パイプトップで釣るほうが、意外に釣果が伸びるのは、タナを凝縮し、エサを止めて、魚に食う間を与えるのが要因かもしれない。

次回は、残された「厳寒期の釣り」と「底釣り」でのグラスムクトップとパイプトップの使い分けについて、解説していきたい。